

こんにちは♪ 「ふえどく」でもお伝えしましたが、クリスマス・イヴのちょうどその日に、**貸出一万冊を達成!**しました♪ 何よりもうれしいクリスマスプレゼントになりました♪ ありがとうございます♪ 図書館を何度も訪れて、本をたくさん借りてくれたみなさまのおかげです。たくさんの、たくさんのご利用ありがとうございました♪ 1万冊の貸出って、君たちと本との出会いが1万回あったということです。すごいことだと思いませんか? これからどこまで数を伸ばせるか楽しみにしています。

さて先日、**芥川賞と直木賞の発表がありました!**

芥川賞は**鈴木結生**さんの『**ゲーテはすべてを言った**』と**安堂ホセ**さんの『**DTOPIA**』が受賞! 直木賞は**伊与原新**さんの『**藍を継ぐ海**』が受賞しました! 今号の図書館通信では、芥川賞受賞の二作と直木賞受賞作を紹介します!

芥川賞受賞作!

『ゲーテはすべてを言った』 鈴木結生

著者はシェークスピアを研究する大学院生。父は牧師で、実家は教会。聖書を読んで育ちました。タイトルは、文豪であり知の巨人である『**ファウスト**』の著者ゲーテはあらゆることに通じていたので、おそらくゲーテならすべてを語ったことだろうということから。ドイツでは、名言を引用するとき、それが誰の言った言葉かわからなかったりしても、「ゲーテ曰く」と前置きさえすればまず間違いはないとされているそうです。そのゲーテ研究の第一人者である統一が、銀婚式に当たる特別な結婚記念日に、娘からレストランでのお祝いの招待を受ける。食後のお茶にと、ティー・バッグをいくつか持ってくると、そのタグの部分に何やら英語で文字が刻まれていることに気づいた。なかなか気の利いたことをする。それぞれのティー・バッグに「愛」に関する名言が記されているのだ。「At the touch of love everything becomes a poet.— Plato」という具合に。あろうことか、統一が引き当てたのはゲーテだった。「Love does not confuse everything, but mixes.— Goethe」(愛はすべてを混乱させることなく、混ぜ合わせる。)ところが、ゲーテのことなら何でも知っているゲーテ研究の権威である彼が、その言葉がどこから引用されているのかわからなかった。気になる。出典はどこだ? 彼はその言葉の引用先を求めて奔走する。名言がその人のものでないことが多いのも百も承知で。

『DTOPIA』 安堂ホセ

「強烈な皮肉とクールな文体。私たちの眼差しを切り開く手術オベのような小説。どこへ連れていかれるのかわからず、ひと晩で読み終えた」。(佐藤究) 著者は東京生まれのブラックミックスで、「アフリカのどこかと日本のハーフで、昔モデルやってて、ゲイらしい」と噂されてきた。デビュー作から一貫して(自分と近しき)マイノリティーの人物が中心にいる作品を書き、マイノリティーに対するさまざまな差別や偏見ウツワに切り込んでいる(過激な暴力描写も厭わない)。「与えられた器ウツワを目いっぱい使って、自分が楽しいものを書く」のが使命。恋愛リアリティーショー「DTOPIA」(デートピア)の新シリーズの舞台は、仏領ポリネシアのボラ・ボラ島。白人女性のミスユニバースを巡って、世界各国代表の十人の男たちが争うさまを滑稽に描く。

直木賞受賞作!

『あい藍を継ぐ海』 伊与原 新

「今日も日本のどこかで大切な何かを受け継ぐ人がいる」。前作『そら宙わたる教室』のTVドラマが大好評だった著者の『月まで3キロ』『八月の銀の雪』に連なる傑作科学短編小説集! タイトルの「藍」は、黒潮のこと。黒潮は、海の中を流れる、濃い濃い碧色の、大きな大きな川に見えるのだそうです。一匹のウミガメを介して、徳島の海辺の小さな町・姫ヶ浦とカナダの島の集まり・ハイダ・グワイがつながります。中学2年生の沙月さつきはアカウミガメを自分で育てようとして、午前3時半に浜に降り立った。卵をひそかに5つ失敬しようというのだ。なんとか卵を掘り出すことに成功したところに、ビーチコーミング(海岸や浜辺に打ち上げられた漂流物を拾い集める趣味)をしている外国人と出会ってしまい、きちんと後始末ができないまま立ち去ることに。仲良しで、十年以上も「ウミガメ監視員」を任されている佐和さんのフォローがなければ、たいへんなことになるところだった。ウミガメを自分で育てようとしたのは、初めてではなかった。小学4年生のときに、白いレジ袋に入り込んで取り残されていた子ガメを見つけ、佐和さんの助けを借りながら育て、海に返した。再会した外国人・ティムは、ウミガメの研究者を探していた。なんと彼の故郷のカナダのハイダ・グワイで見つけたウミガメに<姫ヶ浦 JPN>と書かれたタグがつけられていたというのだ! それが本当なら沙月が育てたウミガメが、黒潮に乗ってカナダまで辿り着いたことになる!

『死んだ山田と教室』 金子玲介

「死んでんすね、俺」。メフィスト賞受賞のデビュー作が、なんと昨年の「ブランチ BOOK 大賞」に！ちなみに表紙は、菅田将暉の弟のこっちのけんとの弟の菅生新樹です！山田が死んだ。あのマジでおもしろくって、本当に性格よくって、人気者だった山田が。誰もが2年E組の中心だと思っていた、あの山田が。ねこを助けようとして、飲酒運転の車に轢かれて死んでしまったのだ。「山田が亡くなり、クラスにぽっかり穴が開いてしまったようです」。夏休みが終わって、山田のいない初めての授業、いちばん賑やかなクラスだった2年E組は、まるでお通夜の続きのようで授業にならないので、担任が急遽授業をホームルームに変えて席替えをすることにした。手ぶらで来てしまったので、くじを作るための紙を誰か持っていないか尋ねたところ、沈黙が続いた。「いや、いくら男子校の席替えだからって盛り下がりがすぎだろ」。山田の声だ！教室のスピーカーから山田の声がする。驚くべきことに会話もできるのだ。山田は生き返った？理屈はまったくわかんないけれど、スピーカーへと生まれ変わった？こうして声だけになりながらも山田がいることで、2年E組はいつものノリを取り戻したのだった。しょーもない男子高校生の日々は再び続いていくのだが、やがて…。

『366日』 福田果歩

「365日じゃ足りないくらい、あなたを愛していました——」。紅白でも歌われた、沖縄出身HYの代表曲「366日」をモチーフに書かれた物語が、赤楚衛二&上白石萌歌W主演で映画化！みなさんは、MDって知っていますか？手のひらサイズの正方形のディスクで、昔は誰もがCDを買って、MDにコピーしていたのです。好きな人に、好きな曲ばかりを並べて1枚のMDにして渡したりしていました。この本は、そんなMDが大きな役割を果たす物語です。沖縄の高校1年生の美海は、二人のMDが入れ替わっていたことから3年生の湊と知り合い、MDを交換するなどしているうちに、初めての恋に目覚める。「ずっと音楽に救われてきた。…だからいつか、自分で音楽をつくりたい」。そのために東京の大学に進学するという湊を「いつか湊先輩の作った曲、聴きたいです」と応援する美海。そして彼女は、2年間めっちゃ勉強して、同じ大学に合格することができたのだった。新しく始まった二人いっしょの夢のような暮らし。湊は音楽会社に就職し、より大好きな人になっていた。ラブラブだった。ところが、彼は急変し、別れを切り出されることに。あんなにも幸せだった日々を、なかったことにするなんて…。

『生殖記』 朝井リョウ

紀伊國屋書店スタッフが全力でおすすめる「キノベス！」で、見事第1位に選ばれました！ かつて誰も書いたことのない、●●●を語り手にした衝撃作！ 「ヒトは二回目ですが、オス個体は初めてです。よろしくお願いします」。その前代未聞の語り手が語るのが、家電メーカー総務部勤務の三十過ぎのサラリーマンである尚成。彼は女性にまったく興味のないゲイで、一人称を「私」で話します。カミングアウトするなんてとんでもない、ゲイであることをひた隠しにし、“絶対にバレてはいけない”と感じています。それがゆえに、小さなころから自分を共同体の一員に非常にうまく擬態している。そんな尚成を語り手がユーモラスに描写していくのです。かつては、たとえば体育館のマットをみんなで運ぶとき、尚成も腕にしっかり力を込めて運んでいました。ところが、今ではまったく腕に力を入れていない。それっぽく振る舞っているだけなんです。これは、マットに限らず、自分が所属している共同体を皆で前に進めようとしているときでも、“自分もそれを運ぶための一員だ”みたいな気持ちを持ち合わせていないのです。何にも考えていず、大きな流れに身を任せ、空気を読む能力だけに長けています。「手は添えて、だけど力は込めず。これが、今の尚成の“しっくり”です」。しっくりが第一の彼にとって幸福とは何なのでしょう？

『小説』 野崎まど

「キノベス！」第3位！ 「本を読んでいるだけではダメなの？」という問いに答えてくれる本！ 5歳のときに『走れメロス』を読んで小説に目覚めた内海修司は、貪るように本を読むようになった。一家が引っ越ししたことは、彼の読書生活をより加速させ、友だちなどひとりもできなかった。ところが小6になって、生涯の友・外崎と図書館で出会う。司馬遼太郎の『龍馬がゆく』の3巻を読んでいたところ、「面白いの」と尋ねるので、1巻を貸してみたところ、すっかりハマってしまったのだった。実はそれまで外崎は本を読んだことがなかったのだった。小説の面白さを共有できるようになった二人は、学校の敷地のすぐとなりの鬱蒼と庭木の茂る古びた大きな屋敷、通称モジャ屋敷に小説家が住んでいることを知り、そこに忍びこもうと試みる。そこには学校の図書室に負けないくらいたくさん本があり、作家先生は「自由に読んでくれていい。勝手に入ってくれてかまわない」と夢のような提案をするのだった。二人はそこで毎日、本を読んで過ごすことに。ところが、やがて、「読んでだけいたい」内海と「書きたい」外崎は道を違えることになる…。